



今月の主な目次

○効果的な初冬季播種による簡易草地更新

○自給粗飼料の有効活用(トウモロコシサイレージ)

○営業所からの宅急便 シリーズ(5)

JAいわみざわでの農薬飛散防止の取り組み事例

時の話題

世界の水資源と日本

7月に北海道洞爺湖でサミット(主要国首脳会議)が開催されました。当初は「地球環境サミット」ということで、地球温暖化への対応など「環境」がメインテーマとしての位置づけでしたが、昨年来急速に進展した穀物相場や原油価格の高騰を背景とした穀物需給の逼迫が、アジアやアフリカなど途上国での暴動にまで発展し世界的な重要課題としてクローズアップされてきたことを受け、「地球環境・気候変動」とともに「食糧・原油価格の高騰」、「アフリカ・開発」などを主要テーマに、G8主要8カ国に加えて中国やインドなどの新興国またアフリカ諸国など多くの国々が出席して行われました。

さて、この洞爺湖サミットで討議された課題の中であまり報道されていなかったものに世界的な水資源・水不足の問題があり、急激な人口の増加と経済発展に伴う水利用の増大によって、地下水位の低下や帯水層の枯渇など多くの国で水不足が問題となっています。現在、世界中で安全な水を飲めない人が11億人、トイレなどの衛生施設のない人は26億人に上ると言われていますが、水不足はこれら生活用水の不足だけではなく、食糧・農業生産への影響も大きく深刻な問題として捉えられています。さらに今後の中国・インドなどの新興国や途上国の経済発展や食生活の多様化、また、地球温暖化による水資源の地域的・季節的分布の変動によって一層の水不足が懸念されており、安全な飲料水と衛生施設の確保、食糧生産のための水確保、生態系の保全、洪水などのリスク管理、水資源の効率的な利用と配分などが、世界的な重要課題とされています。

水不足は、飲用や生活用水、工業用水の不足にとどまらず、農業や食糧生産に直接関わる問題であり、また、農産物の多くを輸入に頼っている日本にとっては安全保障に関わる問題でもあります。農業や酪農・畜産に携わる私たちも「水資源」についての理解を深め、関心を持っていくことが求められています。

国土交通省や農林水産省などがまとめている資料を

基にいくつか整理してみます。

1) 人間が利用できる水は地球に存在する水の0.01%

地球上の水の大部分は海水(塩水)で淡水は約2.5%、そのうちの大部分は南・北極地域の氷や地下水として存在しており、人間が利用し易い河川・湖沼水として存在する水は0.01%、約105千km³とされています。

2) 利用している水の70%が農業用水

世界の水の使用量は約4,000km³で、灌漑などの農業用水が全体の約70%を占め、残りは工業用水20%、生活用水10%となっています。

3) 日本の水資源・水利用

我国は四方を海に囲まれ、アジアモンスーン地帯に位置することから降雨量も多く、比較的水に恵まれた環境と思われていますが、人口一人当たりの利用可能な水資源量は世界平均の約1/2程度で、かつ地形が急峻で河川の流路が短いこと、降雨が台風期に集中することなどから有効利用に工夫が必要な状況です。

4) 水資源の輸入国?

食料自給率が40%で農産物の多くを輸入に頼っている我国の実態は、その食糧生産に必要な水を海外に依存しているということになり、世界の水資源に関わる問題は日本の食糧安全保障に関わる問題であると言えます。オーストラリアでの大干ばつが、小麦や乳製品など日本の農業・食卓に大きな影響を与えたことは記憶に新しいところです。

水に関わる問題は、水資源の確保から浄化・再生利用も含めた有効活用、また、生態系との関わりなど幅広い分野にまたがっていますが、少ない水でより多くの需要をまかなうこと、すなわち水の生産性を上げることが重要な課題とされています。この分野で日本が持つ技術力は高く世界の水問題への貢献が期待されており、灌漑水をはじめとして多くの水を必要とする農業、酪農・畜産生産においても、従来にも増した節水技術・効率的生産への取組みが求められます。

あらためて、牧草・飼料作物や食品副産物など国産の自給飼料をベースとした酪農・畜産への取組み、「水」も加えた土-水-草-牛による資源循環型農業、持続型社会の実現に向けて取組んでいかなければならないと考えています。

(研究開発本部 取締役本部長 岩見田 慎二)